

特別である理由



ユネスコ無形文化遺産に登録された三紙を使用して作られた扇子

2014年11月に「和紙日本の手漉(てすき)和紙技術」に石州半紙(島根県浜田市)、本美濃紙(岐阜県美濃市)、細川紙(埼玉県小川町、東秩父村)がユネスコ無形文化遺産に登録された。登録された三紙は一体何がそんなに特別なのだろう?他の和紙とは何が違うのであろうか?このことについて、ハフィンゲトンポストジャパンが分かりやすい記事をまとめていたので、引用しながらみなさんと知識を共有できればと思う。

●原料は楮だけ

和紙の原料には、楮(こうぞ)や三椶(みつまた)、雁皮(がんぴ)などのほか、イネ、竹、笹、木材パルプなどがある。原料の違いによつて紙の風合いも異なるとされるが、登録された三紙は、楮のみを原料としている。

楮は光沢があり、雁皮や三椶に比べると繊維が長い。ため、美しく強靱な和紙を漉くことができる。原料のどの部分を使うかによつても、漉き上がった紙の特徴に違いが出る。楮の皮は外側から順に「黒皮」「甘皮」「白皮」という三層になっているが、本美濃紙や細川紙は一番内側のみが使われる。石州半紙は甘皮を残して白皮と共に使うため、強度がある。石州の紙はそのため特別強靱であり、ほんの少し緑がかつた茶色の色合いをしている。



楮の花(美しい!)

●国産の原料のみを使う

和紙作りに使われる楮は、外国から輸入されているものもあるが、海外産の楮は紙にした時に油の塊が残るなどの問題もあると言われている。

そのため、石州半紙は地元産の楮を、本美濃紙は茨城県で栽培される最高級の那須楮(なすこうぞ)を、細川紙は地元産または四国産の楮を原料に限定している。

しかし、国内の楮の生産者は減っている。楮の栽培はあまり手間がかからないが、収入が他の業種に比較して非常に少ないため、そのため日本産の苗木を海外に移植することも行われたが、外国で育つと現地産の特性が変わつてしまふ、国産の品質を保つことができないという。



三隅町産の楮の原木

●だんだんと白くなる

通常、白い紙を作るための漂白には薬品が使われるが、三紙は薬品による漂白を行なわない。そのため、だんだんと紙が白くなるという。

例えば、現在よく使われる障子紙は、大部分が塩素漂白されている。塩素漂白をすることで、紙を漉いた直後は紙の白さがより鮮やかになるが、紫外線により黄ばみができる。一方で、塩素漂白をしない場合は、出来上がった当初は鮮やかな白ではないが、紫外線により

より少しずつ白みを増す。そのような経験をしたことはないだろうか?実はこのような理由だったのだ。

●水が良い

良い和紙を作るには、水質も重要である。

石州半紙をつくる石見地方は地盤に石灰岩がなく、紙を変色させる原因となるカルシウムやマグネシウムイオンを含まない軟水が豊富にあるため、一年を通して質の変わらない紙を作ることができるという。



三隅川

美濃和紙も長良川などの水質に恵まれ、細川紙をつくる小川町も秩父山麓を源とする槻川のおかげで水質が良く、酒造りがさかんで古くから「関東灘」の異名を持つほどだ。練りとなるトロロアオイの効きも、水の性質によって変化するという。三隅町の和紙工房や石州和紙会館では地下水を汲み上げて、紙漉きに利用している。自然の地下水の方がトロロアオイの効きがいいという。

●日本固有の「流し漉き」

三紙には、紙を漉く過程にも日本固有の「流し漉き」の方法が使われている。

古代中国で紙が発明されたころからの「溜め漉き」の技法とは異なり、紙料液を漉き簀(す)に入れ全体を揺り動かす技法だ。揺り動かすことで紙の繊維を絡めやすくしており、破れにくいなどの紙の強度を上げることができる。



流し漉きの様子

●水に強い

手漉きによる和紙は、機械漉きによる和紙と比べて水に強いという。特に、天日でじっくり時間をかけて乾燥した手漉き和紙は、水分をゆっくり飛ばすことで、水分を含んだときにも破れにくくなる。

「特別」である石州の紙を大切に後世に残していくためにも『LOVE♥石州半紙』の旗を掲げよう。